



# 春

# 京都



祇園は恋し

## 麗しの不順

近頃の若い研究者や技術者が、現実の生データを偏見無く見る事より、極めて便利で有用とされているソフトウェアで処理された結果や数値のみで状態が完全に表され、それでわかったと思い、それで判断して、人間としての常識からすれば明らかにおかしくてもそれに気が付かないと言う間違いを起こすのは特別な事ではないらしく、今年は気象庁が、今年の桜の開花は例年より極めて早くなるとの予報

を、目に触れる景色や空気からして、「そんなのおかしいよー」とは感ぜず発表し、旅行業者を始め色々な人に大きな迷惑をかけました。

京都の今年の桜は、ほぼ例年通り、3月29日辺りから咲き始めました。通常ならば満開の桜は3日程度で、雪のように散り始め、1週間は絶対に保たないのですが、4月第一週の半ばに冷え込み、7日、8日の土日も満開、平年の気温に戻っても、14日、15日の土日も特に落下盛んという風でもなくほぼ満開、ようやく16日の月曜日ぐらいから落下盛ん、桜も終わりかな、と言う風情。 武士の死に方の理想を、桜の花の散り方になぞらえた日本人的感覚も、修正を迫られる状況になってきた様です。

花にあふれた京都は、本当に綺麗で、それが例年の2倍以上の期間、楽しめた今年は、まさに華麗なる不順とも言うべきものでした。しかし一方、植物園西、賀茂川土手の枝垂れ桜は、花が付かずに葉っぱの出てきたものが多いとか、やはり、本当に不順で、「華麗なる」なんて言って喜んではいけないのかも知れません。



辰巳神社

# イタリア、フィレンツェの 京都大 酒樓

年度末、イタリアに失礼しておりました間、花の都フィレンツェで駅前の交差点から東方50mくらいのところに、“京都大 酒樓”を見つけて嬉しくなりました。京都とフィレンツェは姉妹都市 <http://www.city.kyoto.jp/somu/kokusai/contents/sister/florence.html> ですし、それとは別に中国人が漢字でフィレンツェを表現すると、やはり自ずと京都となるんでしょかね。

(吉田英生 航空宇宙工学専攻 教授)



## お知らせ

ご承知の方もおられると存じますが、1965 ~ 1983 まで機械教室に在籍されておられた三輪 恵 先生が、この3月をもって、徳島大学をご退職になりました。これを記念し、京都大学において下記の講演会を催しますので、お知らせします。

開催日時：平成19年4月28日(土)

14 : 30 ~ 16 : 00 三輪先生ご退職記念講演会  
「ディーゼルエンジン 40 年」  
16 : 00 ~ 17 : 00 三輪先生を囲んで (茶話会)

場所： 講演会：京都大学工学部 2 号館 (元の機械の建物) 202 室  
[http://www.kyoto-u.ac.jp/access/kmap/map6r\\_y.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/access/kmap/map6r_y.htm)

なお、講演会に続いて、17 : 30 ~ 19 : 30 の予定で燃焼研 新・旧 O B 会 (宴会、  
宿泊可) を企画しています。詳しくは、下記 HP をご覧下さい。

<http://cpel.energy.kyoto-u.ac.jp/Japanese/J-information.html>

## 京機会九州支部の「春の行事」

平成 19 年 3 月 24 日 (土) に、九州支部初の試みとして、家族連れで楽しめるように、  
福岡県太宰府の九州国立博物館を見学しました。九州国立博物館では、副支部長  
の井手 亜里 先生 ( S52 電子) が、最新のハイテクスキャナーを駆使して文化財の  
保存の仕事をしておられます。

川口会長、小澤前  
会長、中谷関西支部  
前支部長を始め、本  
部・他支部から大勢  
のご参加をいただき  
ました。久保先  
生、松久先生、井手  
先生がご夫妻で参加  
された他、ご家族の  
参加が 10 名に上  
り、総勢 30 名と九  
州支部始めて以来  
の大盛会になりました。



まず、「科学技術が支える美の世界」と題して、井手先生の講演と、井手研究室の  
中西 陽子氏の実演により、ハイテクスキャナーによって「南蛮図屏風」や、古文書  
が詳細に観察される様子が紹介されました。1cm 四方をスクリーン一杯に拡大し

ても画像が粗くならないことや、使用されている顔料の分析ができること等、驚きの連続でした。

次に、ボランティアにより、館内主要施設と博物館の建物構造の特長を案内していただきました。平成17年秋に完成した九州国立博物館では、斬新なデザインの建物と古代から伝わる文化財が時代を超えて調和しているように感じました。「文化交流展示室」では、日本と東アジアの文化交流の歴史を学びました。



最後に、一般には非公開の博物館「バックヤード」で、傷みやすい木や紙でできた文化財を細心の注意を払いながら、手作業で修復している様子を見学しました。その後、大宰府天満宮参道の大正浪漫の喫茶店「風見鶏」で懇親会を開催しました。ご家族の参加が多かったので、普通の同窓会とは一味違った楽しい家族的雰囲気になりました。

川口会長、小澤前会長、3先生ご夫妻を始めとする有志は、二日市温泉の大観荘に宿泊し、第二部懇親会や、温泉三昧を楽しみました。



# 久保愛三先生の最終講義について思う

本田 博 (昭和 47 年卒)

久保愛三先生とのお付き合いは、1970 年代後半から 1980 年代前半にかけて、日本機械学会などの歯車関連の講演会でお会いした時期に始まり、その時先生は、京都工芸繊維大学に勤めておられた。その後、京機会の催しでお会いするようになったのは、2001 年 2 月 3 日に、東京で関東支部設立総会が開催されて以降の事である。筆者の学生時代 (1968 年 - 1972 年) は、河本實先生が材料力学関係、会田俊夫先生が機構学関係の講義を担当され、1985 年 10 月に、筆者が京都大学に "Research on the Strength of Racks for Jack-Up Units" と題する学位論文を提出した時は、主査が柴田俊忍先生、副査が矢部寛先生と駒井謙治郎先生であり、久保先生は助教授を務めておられた。

先日の 3 月 30 日の最終講義の初めに、ドイツに留学された久保先生が、アメリカの Dotty and Darle Dudley ご夫妻と 1977 年に撮影された写真を示された事に、まず新鮮な驚きを覚えた。その理由の一つは、筆者が、1972 年 4 月に民間企業の研究所に入り、機械研究室で歯車の仕事に携わった時、最初に読んだ洋書が Darle W. Dudley (General Electric Company) 著の Practical Gear Design (McGraw-Hill Book Company, Inc., International Student Edition) であったからである。「アイゾウ、あんたの計算ではそうなって、恐らく間違っではないいんだろうけど、実際には予想していなかったような色んなことが私の経験では起こるのだよ。」という Dudley 氏の言葉に、先駆者としての誇りと、後に続く者に対し、真摯かつ親切に教えてあげようという、古き良きアメリカ人らしい誠意が感じられる。写真では、Dudley 氏ではなく、夫人が真中に写っておられたが、若かりし久保先生の事をお認めになられ、Dudley 氏と同格の扱いにしてあげようというご夫妻のご厚意ではなかったかと思う。もし久保先生がドイツではなくアメリカに留学されていたのであれば、同国で自分の後を継いで歯車の分野を引っ張って行って欲しいという願いなども込めて、久保先生が中央の位置に誘導されていたのかも知れない。

ミュンヘン工科大学に 2 年間国費留学されていたので、ドイツの先駆者である Niemann 先生や Winter 先生のお話を、次の何らかの機会に是非お聞かせいただければと思う。久保先生は、同志社高校のご出身であるが、1999 年に筆者が同志社大学で行った講義を受講した学生の中にも、ドイツの国費による留学をしている工学専攻の女子学生がいる。2006 年 9 月から 10 月にかけて一時帰国し、筆者を千葉県習志野市に訪ねて来られたが、彼女の行動や話の中から、同国でも、常に積極的な姿勢が必要であり、また重要である事が伝わってくる。

筆者は、1974 年から 1976 年まで米国のペンシルバニア州立大学大学院にいたが、Dudley 氏が所属されていた GE のマサチューセッツ州リン工場・サウスカロラ

イナ州グリーンビル工場、Westinghouse 中央研究所、National Broach and Machine Division, Philadelphia Gear Corporation, Gleason Works などの技術者や Wisconsin 大学の先生らに手紙を書いて、見学や討論の為の訪問の申し込みをした事が記憶に蘇る。訪問先では、筆者が、あまり経験のない学生であることを知ると、先輩技術者や技術経営者達が、先生が生徒に教えるかのように、実に懇切丁寧に教えて下さったことが思い出されるが、久保先生は、30 歳代前半で、既に Dudley 氏と対等に討論しておられたようである。

1970 年代半ばには、ミシガン州などに自動車関連用を中心に歯車及び歯車工具メーカーが数多くあり、歯切り用の工具の設計一つにしても、経験に裏打ちされた技術に学ばされる事が多かったが、これらのメーカーも今はもう殆んど無いということ、標記のご講義で伺って、時代の移り変わりを感じる。アメリカの大学から全米大学連盟東京留学センターへ 2003 年に留学し、筆者の「The Contemporary Economy of Japan (現代日本経済)」と題する講義を受講したアメリカ人学生の中に、ミシガン州と日本の経済関係についての期末レポートを書いた者がいた。それによると、同州には、日本の自動車メーカーの工場は見当たらないが、日本企業のエレクトロニクス・精密機械・化学品・(タイヤを含む)自動車部品・機械工具などの工場は数多くあり、その様な事も影響しているのではないかと思う。

Dudley 氏と 1977 年に対談された 4 年後の 1981 年 8 月末から 9 月初頭にかけて東京で開催された「歯車と動力伝動の国際シンポジウム」では、久保先生が、オーガナイザーとして世界各国から来日された関係者を相手に、ドイツ語や英語を駆使して、忙しく動き回っておられたことが記憶に残るが、このシンポジウムを成功裡に纏められた事によって、その後の久保先生の歯車分野での役割が決定づけられたものと思う。

筆者も、"On Fatigue Behavior of Torch-Cut Racks" と題する講演論文を発表させていただいたが、諸先生方には、発表力の方をお認めいただき、会田俊夫先生のお招きで、日本機械学会会長を務められた東京工業大学の中田孝先生らと昼食を共にさせていただき、大変光栄に感じた思い出が蘇る。

1985 年、筆者は、工業技術院機械技術研究所に招聘研究員として滞在されていた NASA Lewis Research Center(現在、NASA Glenn Research Center)の Dennis P. Townsend 氏の講演会に出席し、これをきっかけに同氏とお付き合いさせていただく事になった。同氏も Dudley 氏と同様に GE に勤務されていたが、NASA に移られ、航空宇宙用の歯車・その他の動力伝動機構の分野で多大な業績を残され、1991 年 10 月には、Dudley 氏と共著で、Gear Handbook: The Design, Manufacture and Application of Gears を出版された。Townsend 氏には、筆者が ASME に投稿した論文に対し、論文査読委員長としての労を取っていただき、ご夫妻で千葉県市原市に居住していた筆者及び家族をご訪問いただき、後年、筆者も、NASA

の研究室に訪問させていただいたが、久保先生とも、歯車の関係で長くお付き合いされていたと聞き及ぶ。 NASA は、歯車の分野でも膨大な研究資料を有し、筆者が学位論文を 1986 年に謹呈させていただいた時には、NASA から分厚い研究資料をお送りいただいた事が懐かしく思い出される。

先生のご高説の通り、歯車は、限られたエンジンの性能と人間の欲望に基づいた機能を結びつける為の仲介的な役割を果たす機械であるが、そのような機械の研究に長年携わって来られた先生のご体験や視点、それに人間性などが、オーガナイザーとしての真価を発揮され、成功される事に繋がったのではないかと思う。 また、人間の周波数特性のお話、ピッチングの写真とそれにまつわる目くらましのお話などは、時間と疲労が伴い、根気が必要とされる歯車の実験的研究を行なう過程でのご苦労の中から生まれてきたものと思われ、説得力のあるお話であった。

長年、歯車と動力伝動の分野を引っ張って来られたご業績に対して、心から敬意を表し、かつ感謝の念を抱く事を禁じえない。 近年、京機会の活動が盛んになり、京機短信の編修などにおいても、大いにお世話になっている次第であるが、今後の久保愛三先生並びに奥様の益々のご活躍とご健勝の程を心から祈念申し上げて、結びの言葉とさせていただきたい。

2007年4月8日 本田 博 筆